

「「チーム学校」体制に応じた教育者養成におけるカリキュラムに関する調査」に関連してのヒアリングからの考察

金子嘉宏

日時：2020年1月23日14：30～15：30

対象：文学部教授・教職課程センター 喜岡淳治先生

場所：成蹊大学教職課程センター会議室

今回のヒアリングは、大学全体としてでなく、喜岡教授個人でご対応くださったことを最初に述べておく。

### 「チーム学校」に関連した講座の内容

教職の意義及び教員の役割・職務内容の「教職論」という講座を開催しており、チーム学校についてもその中で触れられている。テキストは「教職の意義と教員の職務」篠田信司（元武蔵野市立第一中学校校長）と喜岡教授が現役自体に出されていた学級通信などを活用されている。喜岡教授が中学校の教員をされていた際の実験の経験を事例に、どのようにチームをつくっていたのかに重点を置いているとのことである。地域の方や企業など学校外の人材のとのチームではなく、学校内の教員のチーム、もしくは、周辺の学校とのチーム作りについての事例であり、教育活動に地域の方が関わるようなことには重点を置いていない。当時は「チーム学校」という言葉も施策もなかったため、校長からの指示や学校全体の施策として行っていたのではなく、各教員が自主的に連携して行事などを行っていたとのことである。

### 「チーム学校」についてのご意見

喜岡教授の個人的な意見と断られてではあるが、「チーム学校」という施策で、地域の方が学校に入っていくのは当然いいことであると思うが、施策として上から「チーム学校」をつくっていくのではなく、教員が主体的に何か目的をもってチームを作っていくべきであり、「チーム学校」ありきではないのではないかというお考えを持たれていた。また、学校外とのチームでなく、学校内、学校同士のチームづくりを考えていく必要があるとも考えられておられた。

喜岡教授の教員像をお伺いしたところ、「子ども達は学校に勉強だけをしに来ているわけではなく、子ども達の居場所を作ることが教員の役割」というお考えを持たれており、その教員の思いの中で、地域や企業と連携して、教員が主体的にチームを作っていく状況にしていくべきではないのかと、「教員の主体性」を意識されておられた。

### 考察

学校には多様な新たな施策が外部から導入される。「チーム学校」も学校側から見れば、また新しい施策が導入されたという負のイメージを持たれてしまう可能性は十分にあり得る。学校に外部から導入されるのではなく、学校の内部に課題解決の方法として「チーム」を形成しようとする意識を醸成していくことは「チーム学校」を広く普及していくためには大切な視点であると気づかされた。

また、「チーム学校」を形成する際、学校の内部でのチーム、周辺の学校とのチームづくりも、外部とのチームづくりと並行して進めていく必要があるという点にも新たな気づきであった。